

# AN INTERVIEW

## WITH PTR FOUNDER AND PRESIDENT, DENNIS VAN DER MEER

【デニス・バンダーミーアとの対談】

PTR の教育部門のディレクターのマイルス・ウィリアムス(MW)とデニス・バンダーミーア(DVdM)が、過去数年にわたるゲームの変遷がテニスの指導に及ぼした影響について対談した。そういった変化に PTR の指導法がどのように対応してきたのか、また、将来のテニスプロとしての仕事の展望はどうかを聞いてみた。

**MW:** 長年にわたっての指導法やコーチングにはどのような変化がありましたか。また、テニスプロやディレクターとして成功するために最も重要な資質とはどのように考えますか。

**DVdM:** 過去 30 年間のティーチングプロの総合的なレベルは目覚ましく進歩しています。プレーヤーは知識豊かなコーチから最新かつ適切な情報を得たいので、コーチに対して彼らの技術を向上させる指導ができることを求めています。70 年代以前は、日々の役に立つ実践的な情報を得ることは困難でした。1971 年にスキップ・ハートマンが USTA のイヴ・クラフトとジョン・コノリー等と共に全米オープンの時にテニス指導者会議を立ち上げました。私は、クラレンス・メイブリーのようなトップカレッジコーチたちと共にスタッフの一員として協力しました。これが、広範な分野のエキスパートたちから情報を得るスタートだったのです。我々は、それを一歩進めてテニスユニバーシティのコースマニュアルをまとめ、それが PTR の様々な指導関連書籍の第一号となったのです。USTA の活動はオンラインや指導者教育コースを通じてスポーツサイエンス関連の内容をまとめるのに非常に役に立ちました。

私はテニスプロを雇うとき、人柄や組織力、そして、知識の伝達能力に注目します。デモンストレーションの能力と共にしっかりとしたプレーのレベルを持っていることも重要な点です。テニスのディレクターになるには、加えて、優れた統率力、人間性、責任感が求められます。また、経理面の知識や会計責任についてもディレクターとして成功するには必要な要素です。オーナーの求めていることを理解することができなければなりません。コート上での指導をメインにすることから責任あるマネージメントの職への移行をスムーズにするには、それまでにできる限りの知識を増やしておくことです。こう言ったことに関して経験者のアドバイスが得られると良いですね。

**MW:** あなたが指導を始めた頃、刺激を受けたり指導の道を選ぶことに関しての動機付けになるような方はいらっしゃいましたか。

**DVdM:** よくあることですが、私の初めてのコーチは母でした。私の両親はナミビアで宣教師をしていたのです。母は、カラハリ砂漠に2本の棒を立て、そこにロープを渡してテニスができるようにしたのです。

バックストップはありませんから、できるだけ早く確実に打てることを覚えないと、ボールを追いかけて砂漠を走り回らなければなりません(笑)。私はテニスの虜になり、家族が南アフリカに引っ越したのを機にトーナメントプレーヤーになりました。そして、デビスカップの代表選手選考会に出るまでになったのですが、私は大事なポイントでびびってしまい、代表選手になれませんでした。その後、当時の私のコーチが彼の仕事を手伝ってみたいかと声をかけてくれたことが、その後の私の人生を変えることに繋がったのです。もう過去は振り返りませんでした。私と友人のラッセル・セイモアは南アフリカ全土の学校を訪ね回って指導をしました。ある時、アメリカでクリニックをしてくれないかという誘いがあり、私はそのチャンスに飛びつきました。私はその後、バークレー・テニスクラブのトム・ストウの影響を受けました。私が今まで成し遂げてきたことの多くは、カリフォルニアのトム・ストウの下で働いて築きあげてきた、しっかりした基本のお陰です。彼は、いかにレッスンをシンプルに進めるかということを教えてくれたのです。

**MW:** スタンダード・メソッドの構想を練ったときにまず考えたことは何ですか。また、指導のための指標をまとめる必要性を感じたのは何故ですか。

**DVdM:** 「両性の戦い」(9/20/1973)が終わってまもなく、私とビリー・ジーン・キングは“TENNIS AMERICA”という全米のテニスキャンプを対象とした大きなプロジェクトを立ち上げようとしていました。誰でもテニスに取り組み、楽しく簡単に学べるようにしたかったのです。しかし、雇ったコーチたちが指導を始めたときに問題が起きました。コートによって教え方が違うので生徒たちが混乱してしまったのです。その時、生徒たちにとってシンプルで共通性を持たせる指導の必要性に気づいたのです。実際に指導の方法には何百通りもあり、その多くは効果があります。しかし、我々は生徒たちが様々な指導法を目の前に当惑している姿を目の当たりにしたのです。当時、成長過程のテニス指導者のための系統的な教育がなされていないままテニスブームがやってきたのです。特に、初心者がテニスをシンプルに覚えるためには系統的な手法が必要でした。そのためには、指導者には質の高い指導を和やかな雰囲気で行えるようにするための指標が必要だったのです。

**MW:** 長年テニスを見てきてどんな大きな変化があると感じますか。また、それらのことがテニス指導者たちにどのようなインパクトを与えたと思いますか。

**DVdM:** 最先端の技術を結集した用具の開発とプレーヤーの体力レベルの向上が、多くのプレーヤーに大きなパワーを与えたと思います。昔は決め球であったような打球が、今は、普通のラリーの打球となっています。スピードや動きのトレーニングの結果、今までは届かなかったボールにも届き打ち返すことができるようになってきました。ジュニアやサーキットトーナメントのレベルを比べてみると隔世の感があります。

時としてテニスコーチはツアープロの技術に魅せられて、彼らの技術を体力も筋力も不足した初心者やジュニアに教えようとしています。確かに、ツアープロたちのプレーはエキサイティングで生徒たちの気を引きますが、我々は彼らのプレーを注意深く観察することが必要です。彼らのストロークをいつどのように取り入れたらよいかを判断するには多くの経験が必要です。熱心すぎて先の読めないプロや親が勧める不適切な技術を取り入れた結果、整形外科は繁盛しています(苦笑)。デジタルビデオを用いて分析することによって、プロの技術の良い点と問題点を浮き彫りにすることができるようになりました。ロジャー・フェデラーは素晴らしいです。彼のようなモデルがいることは我々プロにとって大きな助けとなります。

**MW:** 初期の段階での PTR に対する批判として、あなたが開発した指導法はある意味で厳格なものであって、生徒が皆「同じ打ち方をする」のではないかという懸念があったのですが。今、振り返ってみてそれをどのように考えますか。

**DVdM:** そういったコメントについてはいつも不思議に思います。というのは、スタンダード・メソッドというのは個人のスタイルではなくて「基本となる共通項」をベースとしていますから、PTR の指導を受けた生徒の人たちはそれぞれの個性豊かなプレーをしています。ただ、多くの著名なコーチたちは生徒全員が同じ打ち方をするような指導をしてきたのも事実です。というのは、彼らははっきりとしたスタイルに魅入ってしまったからなのです。我々としては、まず、しっかりとした基礎を固めて、その上で、それぞれの性格や身体的特性等にあった自分のスタイルを作り上げてゆくという考え方が求められます。スタンダード・メソッドは、創造力も知識も豊かなコーチが生徒の必要に応じて付加したり調整したりするための基礎として、いつの時代でも適用できるものであって欲しいと思っています。世界の多くのテニス協会が彼らのプログラムや文献に、基本となる「テニスユニバーシティ」のカリキュラムのアイデアを取り入れていることからしても、我々の取り組みが非常にうまくいっていることの表れだと思います。

**MW:** 他の批判として、この方法の主たる対象はテニスをはじめようとする生徒だと言われています。中級や上級のプレーヤーへの指導にも適用できるのでしょうか。

**DVdM:** 私は「批判」が好きです。確かに、この方法はグループプレッスンを通じて初心者が基本ストロークを早く習得できることを目指したものです。これは先行き世界中にかなりの競技者を生むことに繋がります。

我々は、長年に亘ってバンダーミール・アカデミーやキャンプの場で、段階的手法のレッスンを数多くの上級の生徒に対して実践してきました。例えば、コーチ・ヴァーデックのシンプルなサービスリターンの練習法は、ツアーレベルのプレーヤーのリターン技術の向上に役立っています。

私は、オレンジボウルやグランドスラムの大会を見るときにはいつも、プレーヤーがどのようにプレーしているのかを見て、我々の指導法に何か加えたり調整することが必要かどうかを考えています。何人かのトップのツアープロの指導をしていたときに、スイングボレーを単純化して指導に取り入れ、現在も指導に用いています。同様に、「スウェーデン式決め球」も我々の上級者指導には欠かせないものとなっています。長年にわたり、私は、“Advanced TennisUniversity”や、上級の技術や戦術をいかにシンプルに指導するかという内容のセミナーやコースの指導で世界中を渡り歩きました。マスタープロの多くがこれらのコースの実施に密接に関わってくれました。彼らは、グループ指導において、上級のストロークを整備された段階を踏まえながらいかに実践させるかという理解と知識を持ち合わせているのです。

**MW:** あなたは、「両手打ちバックハンド」が今日のゲームの主流を担うようになるまでの時期に指導をされてきたわけですね。このゲームに於ける「革命」はテニス指導者にとってどのようなものだったのでしょうか。

**DVdM:** 私の信条は、プレーヤーが使うようになった技術は一つも漏らさず試みてみて、それが役に立つのかどうかを判断するということです。怪我の可能性が無く役に立つような技術であれば、私の生徒にはいつどのようにして与えるかを考えます。ボルグやコナーズやエバートやアガシなどの人気のあるツアープロたちがこのストロークで成功を収め始めると、多くの生徒たちがこれを学びたがったのです。

我々は誰もが「両手打ちバックハンド」はパワフルな武器になりうるだろうと考えました。私は、この打ち方の長所と短所を分析した後に、いくつかの適用方法(打ち方)と共にレッスンに取り入れるようにしました。テニスユニバーシティのカリキュラムに組み込み、PTR の段階指導への導入に取り組み始めたのです。片手打ちはスライスを打つ上では価値があり必要ではありましたが、この技術(両手打ち)は彼らに比較的簡単に取り入れられる選択肢となったのです。

他に流行を研究して取り入れたのがサーブの技術でした。ラフターやロディックの小さなサーブ動作は多くの興味を引き起こしました。我々はスポーツ医学のエキスパートたちに、バックスイングの共通性と問題が起きる可能性について見てもらいました。ベン・キブラー博士たちは、怪我をしないように注意を払って行うのであれば、小さなバックスイングからのサーブは問題ないという見解に達しました。ラフターはその注意を怠り、ロディックは実践したのです。

**MW:** 多くの指導者は専門化してきていると考えますか。つまり、あるコーチはプロの指導が上手く、あるコーチはジュニアの教え方が上手く、あるコーチは初心者への指導が上手いといったことです。

**DVdM:** 確かに多くの指導者は、それがひいては専門となる部分に情熱を持っています。我々の職業には、様々な分野で満足できる仕事ができるような多くの道筋があります。新しいプロにとっては多くの分

野での経験をすることが重要です。そうすることで、どの分野であれば自分の技術を活かせ、現実的に発展できるのかを決断する助けになるのです。個人的には、私はオンコートの指導であれば何でも好きです。初心者をご指導することからも、我々が教えたプレーヤーがグランドスラムのタイトルを獲るのを見ることと同じくらいの満足と幸せを感じます。もしかしたらそれ以上かもしれません。というのは、初心者の指導がうまくいけばその人はその後一生テニスを愛好しつづけてくれるでしょう。しかし、ウィンブルドンのチャンピオンになりうるプレーヤーは既に夢中になっているからです。

私は、できる限りあらゆる分野を楽しみ能力を高めることを勧めます。そうすることで、あなたに多様性が生まれ、ひいては、クラブのオーナーにとって大切な存在になるでしょう。階段を上につれ、それぞれの部門での努力目標を理解できるでしょう。そういった経験を積むことでティーチングプロのチームの管理ができるようになるのです。

**MW:** 過去何年間も、様々な国からプロのトップ選手を排出してきていますが、数年も経つとトップが入れ替わってしまいます。このことは何に起因すると考えますか。アメリカのトッププレーヤー育成についてどのように感じていますか。

**DVdM:** アメリカは常にテニス大国であるでしょう。我々には素晴らしい施設、プレーヤー、指導者がいます。時に我々はプレーヤーに甘くなって、彼らの向上心を損ねることもあります。近年のトッププレーヤーを輩出してきているロシアや中国のようにあまり豊でない国々では、プレーヤーはテニスを富を得たり豊かな生活を得るための手段と見ています。この目的を達成するためにそれはそれは一生懸命に練習します。我々のプレーヤーもトップを目指して同様に努力をすべきです。しっかりとした基礎を身につけさせて、強い性格に育て上げれば、競技を愛すようになり、アメリカのプレーヤーは重要なジュニア時代からトップへと育つのではないのでしょうか。どの国でも、実績を残したモデルプレーヤーがいることは非常に重要なことです。レーバー、ビラス、ボルグ、ノア、サンタナなどのプレーヤーが出た国の効果を見ればおわかりでしょう。最近では、ミルザ選手が母国インドに大きな影響を与えました。ウィリアムス姉妹の活躍はアメリカの多文化の人たちにテニスに目を向けさせることにつながりました。今は、世界中がフェデラー人気です。彼以上のモデルはいないでしょう。

ヨーロッパ(特にスペインとフランス)では、サーキットや賞金トーナメントを整備して若い選手に多くの機会を提供してきています。私は、我々はこの部分でもっと努力できるのではないかと思います。もし、USTA 支部それぞれがチャレンジャーを開催すれば、それだけで50の大会ができるのです。そして、それに繋がる地域イベントも生まれるでしょう。私がスペインでテニスユニバーシティを行ったことですが、ある参加者があるとき同時に2つのトーナメントに出ていたという話をしました。そこで、スペインから多くの優れたプレーヤーが出てきている理由がわかったのです。近場で費用のかからない大会を

開催できる可能性は沢山あります。我々は、アメリカのプレーヤーにも同様な環境を与えるべきではと思います。そうすれば、自ずからトップが育ってきます。タフなプレーヤーは沢山の競技経験を積むことから生まれるのです。

**MW:** 今、試合中にコーチングできるようになっていますが、このことはテニスにとって良いことだと考えますか。他に、どんなことが考えられるでしょうか。

**DVdM:** 我々は常にどうしたら観客を楽しませることができるかということを考えます。私が思うに“Coaching on Court”は新たな興味を生んでいると思います。WTAの取り組みは非常に厳格で、観客にも受け入れられています。まだ、結論は出ませんが、今のところは良いのではないのでしょうか。

“Instant Replay”や“Challenge”は、ファンにとってもプレーヤーにとってもオフィシャルにとっても画期的なことです。昨年マイアミで初めてこれを見ましたが、以来かなりの反響を得ています。将来全てのイベントに採用されると良いでしょうね。

また、ダブルスでは、第3セットを“Super Tiebreaker”にしたことで、ゲームが盛り上がり、また、競技運営面でも時間の節約に繋がっています。このことで、テレビのダブルス試合の放映が増えるのではないのでしょうか。私は、『Tennis Channel』をスタート時から支援しています。このサイトは、我々熱烈なテニス愛好家たちが求めていたものといえるでしょう。

**【翻訳・監修】** 鈴木真一: アド・イン桜テニススクール(柏市)代表 / PTR インターナショナル・テスター & クリニシャン / PTR テスター委員会委員 / JPTR プロ・オブ・ザ・イヤー(1986)、PTR プロフェッショナル・オブ・ザ・イヤー(2001)を受賞